

KINETICK MARIE

2019.12.6
ver01

作者名：西村龍太郎

住所
電話番号
電子メールアドレス等

「KINETICK MARIE」・登場人物表

マーク (13)	中学生
マリー (13)	スーパーヒーロー
アダム (13)	マークの親友
スコット (13)	いじめっこ
ジェニファー (13)	クラスのマドンナ
ドナルドソン先生 (34)	マークのクラスの担任、情報の先生
ディスオーダー (15)	悪の天才ハッカー

「脚本のタイトル」・懐概・あらすじ

懐概（こうがい）とはあらすじのことです。コンテスト等に応募するときに必要ですが、普通の脚本にはあまり必要ありません。なのでこのページは削除してもらっても構わないでしょう。

ただ制作会社によっては時間がないところがありますので、あらすじを載せておくと時間短縮になる場合もあります。

基本的に800文字程度に収めて下さい。

1. 街・外（朝）

マーク（M） 「僕の名前はマーク・トンプソン」
アパートが立ち並ぶ街の遠景、俯瞰
BOOM
端っこで爆発している

2. 同・車道

必死で走るマーク、その後ろで巨大なロボットが建物を破壊して現れる。
マーク（M） 「今ロボットに襲われてる」
後ろを振り返りながら走るマーク
マーク（M） 「なんでかって？ 僕が知りたいよ！」
ガッ
縁石に足がぶつかる
マーク 「わっ！」
どべしゃ
マーク、前のめりにぶっ倒れる
マーク 「わわ…」
マーク、後ろ手に地面に手をつき振り返り、ゆっくり上を見上げる。マークを覆うようにロボットの形の影が地面にのびる
マーク（M） 「おかあさんごめんなさい——」
迫り来るロボット
マーク（M） 「僕はもう死にます！」
マーク 「うわあああああ！」
叫ぶマーク
ガシャン！
オレンジ色の髪の毛、マスクをつけた女の子が、ロボットの頭を吹っ飛ばす。啞然とするマーク、砕け散るロボットの破片、笑顔の女の子ヒーローがスローモーションで順番に写る
マーク（M） 「僕を助けてくれたスーパーヒーローは、爆弾みたいな女の子だった」

T 「 KINETICK MARIE #01 スーパーヒーローガールを捕まえる！」

マリー 「はい、おしまいっ」

横倒しになったロボットの上にバトルスーツ姿の女の子が立ち、壊れたロボットを踏みつけ見下ろしている。地面に座りながら、それを呆然と見ているマーク。

マリー 「よっと」

マリーがロボットから飛び降り、地面に座り込んだままのマークに声をかける。

マリー 「大丈夫？」

マーク 「あ…あり…あ、あなたは？」

ありがとうを言おうとして質問をしてしまうマーク。それに腰に手をあて、胸を張って答えるマリー。

マリー 「私はスーパーヒーロー。悪いロボットは任せて」

「最近多いから気を付けてね」と言いながら、立ち上がるマークの横を通りすぎ、「ばいばい」と手を振りながら行ってしまうマリー。

マーク 「あ、待っ——」

ガッ、

走り去ろうとするマリーの足が縁石に引っかかる

マリー 「うあゝっ」

べたんっ、

マークと同じ格好で前のめりにぶっ倒れるマリー

驚いた顔で「はっ」とすぐに顔を上げる。

マーク 「だ、大丈夫ですか?!」

マリーがさっ、とマークを見る。恥ずかしいところを目撃された事を知り、マリーの顔が、かああ///つと赤くなる。

マリー 「〜〜〜っ！」

だっ、

マークに背を向け、目を（>く）にして走り去るマリー。

マーク (M) 「行っちゃった…」

呆然と見送るマーク。

マーク (M) 「ん？」

カラカラ

マリーが立ち去った後の地面から転がってくる小さなオレンジ色の細長い容器。マークがそれに気付いて拾い上げる。

マーク (M) 「落とし物かな？」

マーク、手元の容器を見る。オレンジ色がかった透明のプラスチック容器で、中に液体が入っている。実験に使うアンプルのような円錐の形。側面に黒くバイオハザードマークが印字されていて、その端に「私の！」とマジックで書かれている。

マーク (M) 「なんだろうこれ…。とりあえず預かっておこ」

3. 中学校・外 (朝)

中学校の入り口の前。道路に面している。路肩に黄色いスクールバスが停まっていて、生徒が下りて学校に向かっている。

4. 中学校・廊下

マーク (M) 「登校途中なのに酷い目にあったなあ」

ロッカーが並ぶ廊下。数人の生徒が喋ったり歩いたりしてる。マークが自分のロッカーを開け、さっき拾った容器をそこに入れる。

5. 中学校・教室

自分の席に座ろうとするマーク。マークの席は教室中央、前方寄り、廊下側から二番目の席。

マークの後ろではアメフト部のジャケットを着た背の高い男子2人が喋っている。

アダム 「マーカー！ 次の同人誌(ファンジン)のプロットできたよ！」

アダムが後ろから紙の束を持ってマークの方に走ってくる。それに気付いて笑顔で返事をしようとするマーク。

スコット 「うえい、バツツ」

アダム 「わっ」

男子1 「オタクがイキんな」

アダムがアメフト部の男子の1人に足を掛けられ転ばされる。アダムの持っていた紙の束が散らばる。もう一人のアメフト部員がそれを見ながらアダムをからかう。

マークはサッと目を逸らして気付かないふりをする。

ジェニファー 「Hi～」

マークの前方から笑顔のジェニファーが手を振りながら近づいてくる。

ジェニファー 「おはよ。スコット」

手を振り返そうと手を上げかけたマークのすぐそばを通り過ぎ、ジェニファーがスコットの方へ歩いていく。

スコット 「ジェニファー、今日の祭り行く？」

スコットのそばでアダムが紙を拾い集めている。

マークは半分まで上げてしまった手をごまかす。

誰かに見られてないか周りを確認する為に、隣の席に目を向けるマーク。一部始終を見ていた隣の席の青い髪の女子が、見て見ぬふりをして目を逸らす。

紙を拾い終わったアダムが、にこにこしながらマークの所に駆け寄ってきて背中を叩く。

アダム 「ようブラザー！ どうしたんだよ浮かない顔して」

マークが落ち込み顔で俯いたまま答える。

マーク 「ああ、なんかさっきコミック1ページくらいの間に僕の全部を表現された気がして」

アダム 「なんだよそれ(笑) それより聞いた？ 今日またロボットが暴れたんだって」

マークが顔を上げて答える。

マーク 「そうだよ。今朝そいつにひき殺されそうになったんだ」
アダム 「え？ほんと?!」

マーク 「ほんとだよ。まったく、ひどいポンコツロボットだ。どんな
使い方したらあんな壊れ方するんだか」
マークがむっと顔をしかめる。

マーク 「きっとロボットの反乱だぜ」
それを聞いてアダムが笑う。

アダム 「いいや。僕の予想だと、あれは人為的に暴走させたテロ事件
だね」

マーク 「テロ!？」
アダムが腕を組み、片手で顎を触りながら、推理を語
る。

アダム 「どっかのハッカーがハッキングして操ってるのさ。暴れてる
のが解体工事用のロボットっていうのにも悪意を感じるよね」
アダムが怖がらせようとするかのように企み顔で話す。

アダム 「数年前にもロボットを暴れさせて捕まったハッカーがいたで
しょ。きっと今回の犯人もそいつと同じやつだよ。そいつのハ
ンドルネームは「ディスオーダー」。噂じゃ天才過ぎて、逮捕
された当時、そいつはまだ小学生だったって話だぜ」
マークは肩をすくめ、疑うように眉をひそめて一笑に
付す。

マーク 「都市伝説だろ？ おこさまハッカーのいたずらなんかでひき
殺されちゃたまんないよ。陰謀論、陰謀論」

アダム 「陰謀論じゃないよー」
信じてもらえずアダムは(≧△≦)の顔になる。

アダム 「てか、よく無事だったね」
思い出したようにアダムが友人の心配をする。

マーク 「そうだ聞いてくれよ」
マークはわちゃわちゃと身振り手振りをしながら、今
朝起きた出来事をアダムに説明する。
その間に先生が教室に入ってきて「授業始めますよ
ー」と呼びかける。
マークの話聞いたアダムが思わず叫ぶ。

アダム 「マジで!？」

今日の授業が終わった事を知らせるベルがジリリリと鳴る。生徒たちが一斉に教室から出てくるようなシーンを挟み時間経過を表す。

ロッカーの並ぶ廊下。下校する生徒たちが大勢いる。

マークとアダムがその中を進みながら話している。

アダム 「で、その助けてくれたパワーパフガールにお礼が言いたいですか？」

マーク 「そう。助けた市民の1人なんて、その子はもう覚えてないかもしれないけどね」

マークが肩をすくめ肘を伸ばし手のひらを見せるように開き、お手上げの格好を見せる。

マーク 「でも僕みたいなモブキャラがさ、もう一回スーパーヒーローに助けられる機会なんて来ないよね」

マーク。はあ、とため息をつく。

それをみたアダムが励ますように笑顔を見せる。

アダム 「まあね。でももしチャンスが来たら逃しちゃだめだよ。主人公とモブの唯一の違いは、その時に行動できるかどうかだけだからね。その変な落とし物、ヒーローガールに返すんだろ？」

マーク。はっと自分の使命を思い出し、アダムの励ましの言葉の威力に「おお！」と感心する。

マーク 「そうだ、落とし物返さなくちゃいけないんだ！わかったよ、チャンスが来たら意地でも絶対離さないようにしてやる！そしてあの子にしがみついてでもお礼を言ってやるんだ！」

マークの周りでやる気の炎がゴォォォと燃え出す。ガッツポーズしながら目も燃えてる。やる気の出たマークに「がんばって」と言いながらアダムがほほ笑む。

アダム 「あと、今日のお祭りどうする？」

急に炎が消えたマークが、ガッツポーズのままアダムを振り返る。

マーク 「あ、今日だけ」

アダム 「一緒に行こうぜ」

マーク 「いいね」

笑顔で拳を合わせる二人。

マーク 「トイレ行って来るから先行ってて」

アダム 「わかった。じゃあ現地集合ね」

7.

同・トイレ個室

ズボンを下ろし、便座に座っているマーク。肩肘をつき顎を支え目を閉じながら、はぁ…とため息を吐いている。

マーク 「とは言ってもなー。もう会うチャンスなんてそう来ないよなあ」

宙を見ながら、女の子の顔を思い出すマーク。

マーク 「あの子かっこよかったなあ…。またロボットに襲われたら、助けに来てくれるかな」

ボゴン！

急にトイレのドアが吹き飛ぶ。建物の外から突っ込んできた建物解体用の巨大な鉄球が中学校の壁を壊し、マークの座ってた場所スレスレまでを抉って飛んで行く。マークの髪の毛と、トイレットペーパーが風圧ではためく。トイレと外の道路を阻む壁が一瞬で取り払われ、マークが外から丸見えになる。

マーク 「うわあああああ！！」

びっくりして叫ぶマーク。瓦礫がパラパラ落ちてくる。

8.

中学校・外

背中から伸びたクレーンから鉄球を吊るしたロボットが、それで中学校を壊している。振り回した鉄球が壁を突き抜け、勢い余って道路に停まっていた車の一台をゴシッと吹き飛ばす。

中学生 「ロボットの暴走だ！！」

外にいた生徒の1人が叫ぶ。他にも何人か叫んだり、スマホでムービーを撮ったりしてる。

9.

同・トイレ

マーク

「え、なにになに?!」

便器から立ち上がったマークが、ズボンを上げながら外の様子を窺う。

道路に停まってるロボットが体を捻る。再度、ロボットが背中に吊るした鉄球が、マークの居る建物を狙って飛んでくる。

マーク

「うわあああああああ!」

10.

同・外

ドガシャン

鉄球が校舎を粉碎し瓦礫が飛び散る。

11.

同・トイレ

生きてるマーク。瓦礫から頭をかばい、床に倒れて震えている。

12.

同・外

ロボットがまた体を捻り、もう一度鉄球を校舎にぶつけようと動く。

人混みの間を走り抜けるマリー。アンプル型の容器から液体を飲み干す。暴れるロボットのそばに軽トラが停まっている。軽トラに積まれた長い板がジャンプ台のようにロボットの方に突き出している。それを見てにっと笑うマリー。軽トラに向かって行く。

13.

同・トイレ

マークが、倒れたまま顔を上げる。

ロボットの傍に停まる軽トラを踏み台にして、マリーが勢いよくジャンプするのを見る。

14.

同・外

マリーが背中から棍棒型の武器を取り出す。ボタンを押すとカシャンと音を立て、草刈り鎌のような形状に変形する。

マリー

「キネティックマリー参上！」

勢いをつけ、ロボットが振り回す鉄球を吊るしているワイヤーに、鎌をひっかけるマリー。ぐいっとワイヤーが引っ張られたことにより鉄球の軌道が逸れ、ロボットに鉄球が衝突する。

シュタッ

着地するマリー。背後でロボットが大爆発する。

煙をあげる残骸を背に、埃をはらった後、腰に両手をあて、その場にいた群衆に目を向けるマリー。

マリー

「おわりっ」

その直後、見ていた人達から大歓声が沸き起こる。中学生達が大はしゃぎしている中で、先生達が校舎を見ながらつぶやく。

先生

「明日は休講ですね…」

苦笑いするドナルドソン先生。

マリー

「私スーパーヒーローだからよろしくね」

歓声を送る群衆に手を振りながら帰りはじめるマリー。

マーク

「待って」

慌てて駆けつけてきたマークが、マリーを呼びとめる。

マーク 「き、君と話が——」

マークを見て、マリーが慌てはじめる。

マリー 「私用事あるから、また今度！」

マーク 「あの、ちょっ——」

手を振りながら逃げ出すように立ち去ろうとするマリー。

マリー 「じゃあねっ」

グラップルガンに向かいの建物屋上に発射する。

マーク (M) 「ここで食らいつかなくていいのか？ 主人公がもし行動するとしたら、——それは今だ！」

びゅん。

グラップルガンがワイヤーを巻き上げ、マリーがその場を離れる。

15.

空中移動中

マリー 「ん？」

グラップルガンにつかまって建物の間を飛ぶマリー。
違和感を感じ下に目をやると、マリーの足にしがみつ
いてマークがくっついて来ている。

マリー 「え！？ ちょと！何やってるの！？」

マーク 「君とお話がしたいんだ！」

慌てるマリー。

マリー 「ちょっ、危ないって！」

マーク 「1回だけでいいから！」

ぐんぐん建物に近づく。

マーク 「これ重量オーバ——」

ガッ、

ワイヤーの巻取りが終わり建物のへりにぶつかる。その衝撃でマリーは手を離してしまい、二人とも宙に投げ出される。

マーク 「わっ ぶっ」

マリー 「ひゃっ」

ぶつかった建物を通り越して、反対側の路地裏に落下していく二人。

マーク 「うわあああああああ」

マーク 「きゃあああああああ」

16.

路地裏

ボゴン、

路地裏にあった大きなごみ捨て用コンテナに運よく突っ込む二人。ごみ袋がクッションになり無傷。

ぶはっ、

ごみの中から同時に顔を出す。マリーの目元についていたマスクが取れる。

ぐらっ、

重心が偏り、前のめりに傾くコンテナ。驚いてへりにしがみつく二人。

ばたんっ、

コンテナが倒れ、二人ともごみと一緒に地面に押し流される。

どざばあー、

マリー 「ううう……」

よろよろ立ち上がり、頭に付いたバナナの皮を取り払うマリー。

マリー 「もう、…！」

マークに向かって怒るマリー。

マリー 「なにすんのよ！」

マーク 「ごめんなさいっ！」

ひいつ、と身を固くして誤るマーク。憤慨したマリ
ーが、そっぽを向いて立ち去ろうとする。

マリー 「もういい、わたし帰る！」

マーク 「まって！」

一歩踏み出そうとしたマリーは足を引っ張られ、ガク
ッと動きが止められる。

見るとマークがまた、マリ－の足首を掴み、腹ばい
になって引きずられている。

マーク 「君とお話がしたいんだ！」

マリー、あまりのしつこさに引き気味の困り顔になる。

マリー 「私はしたくないし！」

その時マリー－の髪の毛がパリパリと静電気を発し、髪
の色が変わり始める。

マリー 「あっ」

マーク 「今朝助けてもらったのにお礼を言えなくて、それで――」

変身が解けかけているのに気づき焦るマリー。そんな
ことには気づかず喋り続けるマーク。

マーク 「気持ち悪いかもしれないのはわかってるけど、でも――」

マリー 「え、マスク……」

自分の顔に手をあて、マスクが無くなっている事に気
づき、更に慌てだすマリー。どんどん髪の色がくすん
でいく。

マリー 「あ、ちょっと待ってまだ」

マーク 「一回ちゃんとお礼を言いたくて――、だから！」

マリー 「嫌、だめっ！」

腹ばいでマリー－の足を掴みながら (><) の目で喋り
続けていたマークが、目を開けて、ぱっとマリー－の顔
を見上げる。

マークが見上げると、髪型や髪と瞳の色が変わり元の姿に戻ってしまったマリーが、顔を見られてしまい、はっと身がまえている。髪の毛は青色。

マーク

「あれ？」

マークはそれが同じクラスの、隣の席のマリーだと気づく。

マリー

「あわわわ…」

足を掴まれているので逃げ出せず、うろたえるマリー。

マーク (M)

「助けてくれたスーパーヒーローの正体は、隣の席の子だった」

17.

同・路地裏・ここから第2話

マーク (M)

「ここまでのあらすじ。スーパーヒーローの正体は、同じクラスの陰キャ女子だった」

慌てるマリー。他に誰にも見られてないか周りを確認する。

マーク

「……君、マリー・オルティス？」

マリー、マークの手を掴んで、路地のもっと奥の曲がり角に引っ張る。

マーク

「わっ」

18.

路地裏・奥

マーク、角を曲がり、車通りのある道からも人目に付かないところに来る。

マーク

「おとと…」

マリーは壁に背中を付けてる。ほっと一息つくと、マークの方をきっ、と睨む。憤りをぶつけるのをこらえて、ぐーにした両手を顔の横から力強く下に振り下ろ

す。それから、「もう！」と言って体育すわりで壁を背にふさぎ込む。

マーク (M) 「めっちゃ怒ってる…」

マーク 「あの…」

マリー 「最悪…」

マリー、体育座りで組んだ両腕に顔を埋めてる。

マーク (M) 「どうすれば…」

マーク 「えっと、君がスーパーヒーローだったんだね！ 全然気づかなかったよ。はは…」

マリーが腕組みから目元だけを上げ、マークをむっと睨む。

マリー 「誰かに言ったら怒るから。……叩いて忘れさせる」

マーク 「叩いて?! わ、分かった……」

またマリーが顔を伏せる。マークは所在無く頬を搔く。

マーク 「……ごめんなさい。君のことが気になってただけだったんだ。ここで逃したらもう会えない気がして」

マリー 「…」

マリーがまた目元だけ顔を上げ、マークを見る。

マーク 「今朝助けてくれたでしょ。あれ、本当にありがとう」

マーク、目を合わせられず下の方く。

「君は命の恩人だよ。何か君の助けになる事とか、僕にできないかな?……なんて」

マリー 「…」

二人とも地面を見つめたまま、無言の間。

マーク (M) 「気まずい…」

マーク 「あ、あの、どっか座れるところでお話しない? ……僕がおごるから!」

マリー、顔を上げる。何か言いたげにじっとマークを見る。

が、諦めたように視線を下げ、答える。

マリー 「……いいよ」

19.

ハンバーガーショップ

インサート、お店の外観。

マーク 「つまり、その薬を飲むと一定時間だけ髪の毛がオレンジ色になって、スーパーパワーを使えるの？」

マリー 「そう」

店内。窓際テーブル席に向かい合って座る二人。マリーは変身前の服装に戻ってる。

マーク 「じゃあ、それを飲めば僕も……？」

マリーが手に持っているアンプルに軽く指先を向けるマーク。

マリー 「だめ。これ私専用って言われてもらったやつだから」

マリーが薬品をかばうように、両手で持っていたアンプルをひょいとマークから遠ざける。

マリー 「それに危ないし。……私の体はこの薬品に耐えられる細胞でできてるから大丈夫だけど、普通の人が使ったらどうなるか分からないから。もしかしたら死んじゃうかもしれないし」

手元のアンプルを見つめるマリー。

マーク 「そうなんだ……、じゃあ僕が持っても意味ないね」

マークがリュックのポケットを探りはじめる。

マーク 「実は今朝、それと同じの拾ったんだ。君が転んだ時に落としたから、返そうと思って——」

口を小さく丸くして驚くマリー。ごそごそ探しながら

「あれ？」と訝しむマーク。

マーク 「ここに入れたと思ったんだけど……」

学校のロッカーに入れた瞬間のフラッシュバック。

マーク (M) 「あ、ロッカーに入れっぱなしだ」

マーク 「……学校に忘れてきちゃったみたい」

申し訳なさそうな顔になるマーク。またむすっとした顔になるマリー。でもすぐ普通の顔に戻る。

マリー 「でもよかった。あなたが持ってるのが分かって」
「返してくれるのはいつでもいいわ。博士が毎日おかわり6本くれるの。……川とかに流さないようにだけ気を付けて」

マーク 「わかった」

マーク (M) 「この子とこんなに喋ったの初めてだな」
マーク微笑む。

マーク 「それにしてもびっくりしたよ。マリーちゃんがヒーローだったなんて」
「全然いつもと雰囲気違うからさ、すっごく意外だった」
飲み物のストローを咥えながら、居心地悪そうに答えるマリー。

マリー 「変身してる時が、本当のわたしだから……」

マーク 「…？」

マリー 「変身してない弱いときに見られたら幻滅されると思うから…
…正体が分からないように、いつもは目立たなくしてるの」
言い訳っぽくなってしまい、恥ずかしくなりもっと俯くマリー。

マーク 「そうなんだ…」
「いつもロボットと戦ってるの？」

マリー 「うん」
「最近ハッカーっていうハッカーがロボットに細工して悪さしてるから、わたしはそれを壊すの」

マーク 「でたハッカー！ 都市伝説じゃなかったんだ」

マリー 「うん。警察がそう言ってたって、博士が言ったの。なんか、ロボットを暴れさせる装置が仕組まれてて、三年前に同じ事してたのがハッカーなんだって」

マーク 「すげえ…。その犯人は捕まえられるの？」
マリーがそれを聞いて、呆けた顔になる。意味が理解できるまでしばらくして呟く。

マリー 「その考えはなかった…」

マーク 「えっ」

マリー 「いつも簡単に倒せちゃうし。捕まえようとしてなかったかもしれない……」

マーク 「ええ… (汗) 」
顎に手をあて考えこむマリーに、苦笑するマーク。汗の漫符。

マーク (M) 「マリーちゃん、脳筋なのか……？」

マリー 「でも私ディスオーダーの居場所なんかわからないし、警察も見つけられない奴なんだよ」

マーク 「そうだよね…」
マーク、少し考えて何かを思いついた目をする。

マーク 「ん。そのディスオーダーって、変な装置をロボットにくっつけて操ってるんだよね？ ならその装置を埋め込みに来る時には姿を見せるんじゃない？」

マリー 「事前に阻止するのね」
マリーの顔が少し明るくなる。

マーク 「うん。数年前に逮捕されたとき小学生だったって噂だったから、退学してなければまだ学生のはず。そいつが行動するなら学校が終わったちょうど今、この時間だね」
マークがスマホを取り出し、なにやら調べる。

マーク 「最近のロボット暴走事件はこの街に集中してるし、この近くに今ロボットが集合してそうな所を調べれば……。あった。重機レンタルの会社、ここからすぐだ」
スマホの画面をマリーにも見えるようにするマーク。
画面を見た後、顔を見合わせる。笑顔になったマリーが提案する。

マリー 「行こう！」

マーク 「えっ」
次のカットに「えっ」だけオーバーラップ

フェンスを乗り越える二人。マリーはマスクを付け、バトルスーツに着替えている。髪の毛はまだ青色。

会社の敷地内に潜入していく。平屋の事務所と、大きな倉庫がいくつもあり、クレーン車などの重機が何台も停まっている。

マーク 「僕も付いてきてよかったのかな……。もしピンチになったらまた助けてくれる？」

マリー 「もちろん。心配しないで。まだお薬3本もあるし、ロボットに襲われても平気」

「これ1本でロボットの2、3体ならすぐに倒せるの」

マーク 「おおー」

止めてある車やドラム缶の間を身を低くし、隠れながら進んでいく。

マーク 「なんか、潜入ミッションみたいで楽しいね」

マリー 「うん」

マリーがにこっと笑う。

マリー 「見て。監視カメラ」

マーク 「え？」

電灯に取り付けられた監視カメラが、作動中ランプがついているのに、何も映らない真下を向いている。他のカメラも全てそうになっている。

マーク 「わ、やばいよ。ここ、本当に今ディスオーダーが来てるんだ！ 監視カメラをハッキングして堂々と入っていったんだ！」

物陰から隠れるのをやめてササっと移動する二人。

マリー 「あ、ここだ」

大きな倉庫の前。腕付き重機棟と書いてある。

そーっと倉庫のドアを開け、二人とも顔をのぞかせる。
倉庫内には10体近くのロボットが停まっている
マリーを先頭にそろそろと中に入り、木箱やドラム缶
の裏に隠れる二人。

二人同時に、その物陰からひょこっと顔を出す。

ロボットの陰で、人影が動いている。キャタピラの上
に立って、空いたドアから操縦席をいじっている不審
人物。その人影が作業を終え、姿が見える位置に来る。
ディスオーダーのアップ、コマぶち抜き。フードを被
り、顔は真っ暗。左腕に付けたデバイスの画面を見て
いる。

マークとマリー、ゆっくりと頭を下げて隠れる。

マリー 「……本当にいたね」

マークが怯えた顔でマリーを見る。

マーク 「どうしよう。ディスオーダーだよあれ絶対」

マリー、真剣な顔で手振りを交えながら作戦を立てる。

マリー 「大丈夫、私がやっつけるから。あなたはここで隠れてて、私
はこっそり近づいて捕まえる。いい？」

マーク、何度も首を縦に振り、うんうんと頷く。

マリー 「じゃあ、気付かれないうちに…」

マリーが薬のAMPLEのふたを親指でぽんっと空ける。

薬を飲むマリーの横で、マークの携帯電話が、大きな
音で着信音を鳴らす。

びっくりした二人の顔のアップ。白黒劇画タッチで口
をあけ、肝を冷やす顔。マリーの髪の毛は変身中で逆
立っている。

ディスオーダー 「誰だ！」

バツ、と振り向くディスオーダー。

物陰の裏で焦りまくる二人。人差し指で「しーっ！」とやったり、首を手刀で切る動作で「切れ切れ！」とやるマリー。マークはケータイを遠ざけたりぎゅっと握ってスピーカーを塞ごうとしたりして、汗の漫符が飛びまくる。

ディスオーダー 「そこにいる奴！ 出てこい！」

ディスオーダーが身構える。ディスオーダーのセリフはガサガサのフォントで、ボイスチェンジャーの使用を表現。

マリー 「しょうがない」

マリー、隠れていた木箱の陰から飛び出す。（パルクールのトゥーハンドヴォルト）

棍棒を取り出し2本同時に伸ばし、カシャンと鎌の形状にしてディスオーダーと対峙する。髪はオレンジ色で光ってる。

マリー 「スーパーヒーロー参上！」

ディスオーダー 「チッ…」

ディスオーダーが左腕に付けたデバイスのキーボードをカタカタと叩く。

ディスオーダー 「私を捕まえないのなら——」

ディスオーダー、後ろにあとずさりながら、左手に持っていたスマートフォンをタップする。

ディスオーダー 「——こいつらを倒してからだ」

倉庫内に停まっていたロボットが全て起動し始める。

マリーが周りを見渡ししながら、棍棒をぎゅっと構える。強敵を前に、二つと笑った表情。

22. お祭り会場入り口

日が傾き始めている。お祭り会場の外。人が大勢いる
(主に中高生)。アダムが自転車に乗ったまま電話を
耳に当てている。

アダム 「マーク今どこ？」

23. 重機レンタル会社・倉庫内

マークが物陰で小さくなり、電話に耳をあてている。

マーク 「ごめんまた後で掛けなおす！」
背後で金属の衝突音。

24. お祭り会場入り口

アダムの電話がブツツと切れる。

アダム 「あっ、もう、なんだよ」
アダム画面を見て不満な顔。

25. 重機レンタル会社・倉庫内

マーク 「今はそれどころじゃ…」

物陰から様子を窺うマーク。

マリーが鎌の1本を突き立て、ロボットの1体に飛び
ついている。そのマリーを別のロボットが攻撃する。
マリーがその前に大きくジャンプし、マリーがくっつ
いていたロボットの体に、攻撃してきたロボットのア
ームが突き刺さる。

ガラスの破片が飛び散り、マークの頭上から降り注ぐ。

マーク

「うわっ」

目をつぶって頭をかばうマーク。

空中でマリーが、ディスオーダーが逃げていく方向にグラップルガンを発射する。

もう一台のロボットの肩に着地するマリー。持っていたグラップルガンを投げ、飛び乗ったロボットの頭にワイヤーを巻き付ける。

マリー、棍棒1本を両手で持ち、ロボットの肩から飛び降りる。グラップルガンを打ち込んだ壁とロボットの頭の間には張られたワイヤーに、棍棒を引っ掛け、滑走するように移動するマリー。

滑走していく先にいたロボットがマリーを攻撃する。

その前にマリーは手を離して落下し、勢いをつけたまま地面をスライディングして、攻撃してきたロボットの足の下をくぐる。

攻撃したロボットの腕はワイヤーに引っかかり、縛り付けられていた側のロボットの頭がちぎれ飛ぶ。

逃げようとしていたディスオーダーが、ロックされていたシャッターの制御盤を、手に持っていたスマホを使い遠隔操作でハッキングし開こうとする。その瞬間、飛んできた鎌が配電盤に突き刺さりショートする。

マリー

「つかまえた！」

バン！

マリーがディスオーダーに飛びつき、壁に押さえつける。

背後からロボットの腕が伸びてくる。

マリーはニッと笑い180°回転し、ディスオーダーを盾にする。

ロボットの攻撃がディスオーダーに当たる前に、ディスオーダーはもう一度スマホをタップし、全てのロボットの動きが停止する。

ディスオーダー 「はぁ…」

ディスオーダーが負けを認めてため息を吐く。マリーの髪の毛は光るのを止めて、ただのオレンジ色になる。

マリー 「おわりっ」

マークが物陰から出てきて、マリーの方へ駆けつける。

マーク 「やったね！ 本当にディスオーダーを捕まえたんだ！」

マリー 「うん！」

マリーが嬉しそうに笑う。二人でハイタッチする。

マリー 「あとはコイツの話聞くだけね」

マリーが悪い笑みでディスオーダーの胸倉をつかむと、ぐわんぐわん揺すりながら質問を浴びせる。

マリー 「あなたがディスオーダーでしょ！ ロボットを暴れさせる目的を言いなさい！」

揺さぶりが終わり、ディスオーダーの頭の上にぐるぐるが浮かぶ。フードが外れ、帽子とサングラスとネックウォーマーで口元を隠した顔が出ている。

ディスオーダー 「ディスオーダーは私だが、目的は知らない」

またマリーがディスオーダーの胸倉をつかみながら、ぐわんぐわん揺さぶる。

マリー 「あなたがロボットに遠隔操作できる装置を取り付けてハッキングして操ったんでしょ！」

揺さぶりが終わり、ディスオーダーの頭の上にぐるぐるが浮かぶ。

ディスオーダー 「それは私じゃない。私の昔のやり方を模倣した誰かが——」

またマリーがディスオーダーの胸倉をつかみながら、ぐわんぐわん揺さぶる。

マリー 「じゃあなんでここでコソコソロボットをいじってたの！ どう見てもあなたが犯人でしょ！」

揺さぶりが終わり、ディスオーダーの頭の上にぐるぐるが浮かぶ。

ディスオーダー 「私の真似をしてる奴が誰なのか、正体を知ろうと手掛かりを調べていただけだ」

ぐわんぐわんが強過ぎて、ディスオーダーの頭がくらくらしている。

マーク 「この人が犯人じゃなさそうだね」

マリー 「え。じゃあ誰が犯人なの？」

マリーが困った顔をする。

ディスオーダー 「そ、それを今調べていた所だ」

ふらふらの声でディスオーダーが言う。

マーク 「そうだったんですか」

マークが申し訳なさそうな顔をする。体勢を整えたディスオーダーがサングラスをかけなおし、首を回しながら言う。

ディスオーダー 「きっと私の仕業に見せかけ、捜査を攪乱する狙いだろう」

マリーが困った顔になる。

マリー 「どうしよう、手掛かりが無くなっちゃう…」

マークがディスオーダーに聞く。

マーク 「何か見つかりましたか？」

ディスオーダー 「いいや、何も。……だが、ここのロボットには全てに遠隔操作装置が取り付けられているようだ。暴れたロボットは、この会社が貸し出していたものだろう」

マーク 「じゃあ、この会社が貸し出した先を調べれば！」

マリー 「おお！」

マリーとマークが目を輝かせる。

ディスオーダー 「場所は分かっている。起動中のロボットは盗難防止用の信号が発信されているからな。これを見るに、次にロボットが暴れそうな場所は――」

ディスオーダーがスマホのモニターを見せてくれる。
大ゴマ1ページ。

地図のような青っぽい画面に、赤い点が集中している。
それをマークとマリーが見てゾットしている。

ディスオーダー 「今日の祭りの会場周辺だ」

26.

同・倉庫内・ここから第3話

マーク 「大変だ、お祭りをめっちゃくちゃにする気だ！」

マリーとマークが驚愕する。

マーク 「時間がないよ、どうしよう。アダムがあそこにいるんだ！
みんなも、助けなきゃ！」

マリー 「大丈夫。私がすぐ行ってみんな助けるから」
気丈に振舞うが、不安が隠せないマリー。

マーク 「でも10体くらいロボットいたよ。お薬もう、残り2本しかないんじゃないか……」

マリーのベルトに装備されたアンプルのカット。6つ
あるスロットのうち、2つだけ容器が刺さっている。

マリー 「うん……」
マークがディスオーダーの方を見る。

マーク 「ディスオーダーさん、さっきみたいにハッキングして止めて
もらえませんか？」

ディスオーダー 「無理だ。あのロボットはネットに繋がっていない。埋め込ま
れた装置を遠隔で起動しているだけだ。私がさっき動かせたロ
ボットは、直接私が装置をいじったものだけだ」

マーク 「そんな……」
スマホをしまうディスオーダー。

ディスオーダー 「それに私は人助けを手伝う義理は無い。私の目的は犯人を見
つける事だけだ」

マークがしょんぼりする。マリーが笑顔を作って励ま
す。

マリー 「大丈夫。私に任せて。あなたのお友達も全員助けるから」

マーク 「マリーちゃん……」
 ディスオーダーがマリーの方を見る。

ディスオーダー 「なぜ、そこまで介入する？ お前には関係無いじゃないか」
 マリーがディスオーダーを見据えながら、いつもの挑
 戦的な笑顔で言う。

マリー 「私はスーパーヒーローだから。困ってる人を助けなきゃいけないの。私がスーパーヒーローでいるために」
 ディスオーダー、あきれた動作。

ディスオーダー 「分かった。お前らのヒーローごっこに協力してやろう。私は
 ロボットを止める方法がないか探してみる」
 マークとマリー、顔が明るくなる。

マリー 「私はそれまでにできるだけロボットを壊してみる。あと2個
 しかお薬ないから、全部倒せないかもしれないけど……」
 マークがはっとする。

マーク 「薬ならもう一本あるよ」
 マリーとディスオーダーがマークを見る。

マーク 「今朝君が落としていったの拾ったやつが、僕のロッカーに入
 ってる。それで間に合えばいいけど」
 マリーがはっとして顔が明るくなる。

マリー 「3本あれば、いける気がする！」

マーク 「じゃあ僕は学校に行ってそれを取ってくる！」
 三人が別々の出口の方へ動き出す。マークが走りなが
 ら、出口へ向かうマリーに言う。

マーク 「僕が行くまで持ちこたえてね！」

マリー 「分かった！」
 パリパリと静電気が起きて髪の色が変わり始めるマリ
 ー。すぐにもう一本の薬を飲むと、また髪と瞳が輝き
 だす。マリー、遠くを見据え、地面を蹴り飛び出す。

空が少し暗くなっている。昼より人が多い。

観覧車の前だと分かるカット。その日の為に設置された小型のもの。列に並んでいたアダムが、自分の番になり、それに乗りこむ。あまり楽しそうじゃない。

観覧車の椅子に座ると、アダムのスマホが鳴る。それに出るアダム。

マークの声 「もしもしアダム？ さっきはごめん、でも大変なんだ！」

アダム 「マーク、遅いよ！ 僕もう一人で観覧車のっちゃってるからね！」

怒るアダム。観覧車は半分くらいの高さを過ぎている。

マークの声 「えっ！ だめだよ！ 早く観覧車から降りて、すぐ逃げて！」

アダム 「どうしたの？ なんで?!」

暗くなってきているお祭り会場。周りにはポップコーンや綿菓子の屋台や、輪投げや射的の屋台がたくさん。屋台にはもう全部に明かりが付いてる。

スコットとジェニファーがアイスクリームを食べながら、楽しそうに話してる。

ジェニファー 「ん？ なにあれ」

ジェニファーが立ち止まり、遠くを見る。

屋台や林の間から、大きな影が近づいてきている。キュルキュルとキャタピラの音が大きくなる。

スコット 「え？ あれかい？ あれは……」

スコットがへらへらと答えようとし、それを見た途端口をぽかんと開けて、アイスクリームを地面に落とす。

スコット

「what a ——」

ロボットが、屋台がたくさんある方へ進んでいく。

びっくりして避ける人を追い抜いて、屋台の一つに突っ込む。屋台の外に置いてあったガスボンベを踏みつぶす。

ジェニファーから見えている屋台の向こうで大爆発が起こる。

ジェニファー

「大変、またロボットの暴走よ！」

ジェニファーがスコットの方を振り返る。既にジェニファーを置いて走り出しているスコット。

スコット

「わあああああああ！」

両手を上げて騒ぎながら、もう遠くへ行っている。

29.

同・観覧車

困惑するアダム。観覧車の中で電話を耳に付けている。

座ってる位置から外の遠景が見える。明かりが付いた出店が、たくさん下に広がっている。

マークの声

「そのお祭りやってる所でロボットが暴れるんだ！ その周辺に改造されたやつがいっぱい停まってて——」

アダム

「えっ？ え？」

遠くで突然、爆発が起こる。

それを見て愕然とするアダムの顔が、爆発の明るさで照らされる。

アダム

「えっ、爆発してる！」

マークが慌てて説明する。

32.

お祭り会場

ロボットが炎の中から出てきて、ゴミ箱などいろんなものを踏みつぶしていく。

大勢の人々が叫びながら逃げ出す。

暴れているロボットのさらに奥の方から、別のロボットが更に数体、お祭り会場に近づいて来ているの見える。

33.

同

飛び出してきたマリーが暴れていたロボットの頭部に鎌を突き立て、引っこ抜くように両腕を上げて頭部を吹っ飛ばす。

マリー

「キネティックマリー参上！」

逃げてた人達がそれを見て、立ち止まり歓声を上げる。

壊れたロボットの上に立っているマリーを、もう一体のロボットが攻撃する。それに当たる前にジャンプするマリー。

34.

同・観覧車上（夜）

出店の方で爆発がたくさん起こっている。

それを見ながら、どうしようと困惑しているアダム。

観覧車は頂点を過ぎて下り始めているところ。

アダムの乗っている客車の近くに突然、飛んできたマリーが着地する。

アダム

「わっ！」

「えっ、スーパーヒーローガール?!」

マリーはアダムをちらっと見て立ち上がり、お祭り会場を俯瞰する。

マリーの飛んできた方とは反対側からロボットがたくさん近づいてきている。そのうちの一体は観覧車のそばまで来ている。それを見たアダムが声を出し、指をさしてマリーに知らせる。

アダム

「あ、あそこ！」

マリーがそれを確認する。グラップルガンを観覧車の鉄骨に打ち込み、飛び降りる。

35.

同・観覧車下

ロボットの一体が観覧車に突進してくる。逃げ惑う人々。

グラップルガンにぶら下がり振り子のように飛んできたマリーが、ロボットの頭を吹っ飛ばす。

着地したマリーが、人々に声をかける。

マリー

「みんな観覧車の前に集まって！ そっちに行っちゃだめ！」

そっちの方向に走り出そうとしていた人々が、マリーを見て足を止める。マリーの言う「そっちの方向」を見ると、5体ほどのロボットが近づいてきている。慌てて戻ってくる人々。ニっと笑うマリー。

マリー

「タワーディフェンスね」

マリーだけは逆行して、そっちの方向へ駆け出していく。

36.

中学校・廊下

マーク 「それで僕は早くこの薬を届けなくちゃいけないんです！」
先生 「なるほど、それは大変な状況だね……」
マークが必死に状況を説明するのを、真剣に聞いていた先生。

マーク 「先生は警察と消防車を——」
先生 「それは非常にまずいよ」
先生が会話の通じない反応をする。目元が見えない演出。先生がマークの方へ1歩近づいてくる。

マーク 「え？」
先生 「その薬があると、ヒーローがみんなを助けちゃうんだからね」
マークが異変を感じた顔になり1歩後ろに下がる。先生はさらに1歩近づいてくる。

先生 「じゃあ君を止めなきゃいけないじゃないか……」
マーク 「先生？」
小聲でぼそぼそ言う先生の眼鏡は光が反射して目元が見えない。どんどんマークの方に近づいて来て、とうとうマークは追い詰められたように、ロッカーに背を付ける程後退する。

先生 「マーク・トンプソン君。関わりすぎてしまったね」
マーク 「…先生、何を——」
先生 「えええええいっ！！！！」
唐突に鬼の形相になった先生が腕を振り上げる。1ページぶち抜き大ゴマ。

マーク 「えぶしっ！！！」
先生の女の子パンチでぶん殴られるマークの顔ドアップ。
ロッカーに叩きつけられ鼻血が出る。

先生 「ただのモブキャラでいれば死なずに済んだものを、実に哀れですよ」
狂気目で先生がロッカーの一つを開け、マークがそこに押し込められる。

マーク 「えっ、わっ！」
ボタン、とロッカーのドアが叩き閉められる。鍵をかける先生。

マーク 「先生?! なにして——えっ、出して！」
真っ暗なロッカーの内側からバンバンと扉を叩くマーク。

マーク 「やめてください! 僕行かなきゃ!!!」
扉の隙間から先生の顔が見える。凶悪な笑顔。

先生 「ムカつく教頭、邪魔な学校、嫌いな生徒。みんな消えてもらいますよ。私がいくら暴れてもディスオーダーのせいになるんですから」

マーク 「そんな、そんな！」
涙目のマーク。

先生 「校舎の前のロボットも今から暴れますから、君にはついでに瓦礫の下に埋まって貰いましょう」

マーク 「い、いい嫌だあゝあ!!! 出してえゝええゝえゝ!!!」
ロッカーに背を向けて歩き出す、悪い笑顔の先生。
マークの叫び声と、ロッカーをバンバン叩く音が廊下に響く。

走るロボットの肩の上で、マリーがロボットの背に付いたクレーンのワイヤーを振り回している。先端は丸く投げ縄みたいになってる。それを放り投げて、前を走るもう一台のロボットの頭に引っ掛ける。引っ掛けられたロボットの頭部がワイヤーで引っ張られて吹っ飛ぶ。

ワイヤーを持ったままロボットから飛び降りるマリー。ワイヤーをロボットのキャタピラにくぐらせる。キャタピラにワイヤーが巻き取られたロボットが前のめりに倒れてグシャッとつぶれる。

マリー

「ふう…」

膝に片手をつき、手の甲で汗を拭くマリー。パリパリと静電気が起こり、髪の色が変わりそうになる。

マリー

「あわっ」

すぐに最後の1本の薬を取り出し、キャップを飛ばし一気に飲む。また電気が起こり、髪と目が光り出す。

マリー

「よーし…」

暴れているロボット達を見据えるマリーの後ろ姿。あたり一面炎で明るくなってる。

閉じこめられているマーク。はあはあ過呼吸になっている。

マーク

「落ち着けマーク落ち着くんだ」

狭い中でポケットのスマホを取り出す。ボタンを押し、マークの顔が明るく照らされる。

マーク

「誰か助けを…」

手が滑ってスマホを取り落とす。

マーク

「あっ」

ゴトッと音を立てる。また暗くなる。

マーク

「そんな、まってそんな」

狭くて膝が折れず、しゃがめない。「ん～」っと、腕をいっぱい伸ばすが届かない。

また過呼吸になるマーク。

マーク

「だっ、だれか助けてええええええ！！！」

マークの声が誰もいない廊下に響く。

39.

お祭り会場（夜）

解体用鉄球が屋台をなぎ倒す。倒れてきた看板がスコットに迫る。

アダム

「危ない！」

看板が倒れる。押しつぶされそうだったスコットを、アダムが体当たりして助ける。倒れたまま顔を見合わせる2人。スコットの顔が赤くなる。

スコット

「あ、ありがとう……」

マリーが両手に持っていたガスボンベを2つとも投げつける。ガスボンベが操縦席のガラスを突き破り、内部から爆発するロボット2体。

膝に手をつき、疲れた様子を見せるマリー。

マリー 「はあ…はあ…」

マリーの前方にだけでも、まだ3台のロボットが暴れている。

息を整え走り出そうとしたマリーの後ろから、ロボットが突進してくる。

マリー 「！」

逃げるのが間に合わない。驚いて身構えるマリー。突進してきたロボットに、横からもう1台のロボットが激突する。操縦席にディスオーダーが乗っている。

マリー 「ディスオーダー！？」

ディスオーダー 「勘違いするな、私はこの犯人の邪魔をしたいだけだ。早くいけ！」

マリー、笑顔を見せると、また走り出す。

マーク 「ん？」

絶望していたマーク、片手に持っていた物に気づく。

マリーに届ける薬品のアンプル。

表情が変わるマーク。

42.

フラッシュバック

ハンバーガーショップでマリーと話した時のフラッシュバック。

マーク

「じゃあ、それを飲めば僕も……？」

マリー

「だめ。これ私専用って言われてもらったやつだから」
マリーが薬品をかばうように、両手で持っていたアンプルをひょいとマークから遠ざける。

マリー

「それに危ないし。……私の体はこの薬品に耐えられる細胞でできてるから大丈夫だけど、普通の人が使ったらどうなるか分からないから。もしかしたら死んじゃうかもしれないし」

43.

中学校・ロッカーの中

マーク (M)

「これを飲めばマリーちゃんみたいに……。でもマリーちゃんはダメって言ってたし、スーパーパワーが使えるようになる確証は無い。もしかしたら死んじゃうかもしれないし……」

思案していた表情から、決意したような顔に変わるマーク。

マーク (M)

「いいや、僕はチャンスにしがみつくて決めたんだ！」

アンプルを口に持っていき、キャップを外すマーク。

マーク (M)

「アダム達を助けて、マリーちゃんにお礼を言ってやるんだ！！！」

口を付けて一気に飲み干すマーク。

カッと目を見開く。

44.

中学校・廊下

ロッカーの扉の一つが凹んで弾け飛ぶ。

45.

中学校・外（夜）

マーク 「うおおおおおおおおおお！！」
超サイヤ人のように金髪の逆立った、ムキムキのマークが校舎から飛び出してくる。

先生 「何っ！？」
車に乗ろうとしていた先生が驚いて振り向く。
上からムキムキのマークが落ちてくる。
ドン！

先生 「うわああ！！」

マーク 「ええええい！」
鬼の形相のマークが腕を振り下ろす。ぶち抜き大ゴマ
1 ページ。

先生 「えぶしっ！！！」
マークの女の子パンチでぶん殴られる先生の顔ドアップ。
車の窓ガラスを突き破り気絶する先生。

マーク 「待ってるアダム、今行くぜ！！」
眼鏡が割れ歯が欠け舌を出し頭上に星が回ってる先生を残して、祭り会場の方へマークが駆けていく。

46.

お祭り会場（夜）

観覧車の下に集まっている人々。そこにロボットが突っ込んでくる。マリーがそのロボットの操縦席の窓をパンチで叩き割り、ハンドルをいっぱい切ってロボットを横転させる。

地面に投げ出されるマリー。人々に心配されながら立ち上がる。

向こうでボロボロになったロボットからデイスオーダーが飛び降りる。敵ロボットを巻き込んで、脱出したロボットが爆発する。

マリーの髪の毛が静電気ではちばちしだす。

ロボットの1体が観覧車に激突する。

マリー

「ああ！」

ゆっくり倒れ始める観覧車。みんなが叫びながら慌ててその場から離れる。逃げ遅れたジェニファーが転んでしまい、マリーが駆け寄る。上を向く二人。もう間に合わない。

第一話冒頭のマークと同じコマ割りで叫ぶマリーとジェニファー。

マリー

「きゃあああ！」

ドン！

落ちてきた観覧車の鉄骨を受け止めるムキムキのマーク。大ゴマ1ページ。マークの支えで出来た隙間で助かった2人がマークを見上げる。

マーク

「うおおおお！」

マークが観覧車を持ち上げ、放り投げる。バタンと反対向きに倒れる観覧車。反対側にいたロボットが逃げ出そうとするが、まとめて全部押しつぶされる。飛ばされたロボットの頭部が、「ハンマーで叩くと鐘が鳴るゲーム」の台にぶつかり、コーンと鐘になる。

大爆発が起き、ムキムキマークのシルエット。それを見るジェニファーとマリー。

マーク

「おまたせ」

マークが振り向く。ロボットが居なくなり、みんなの大歓声が響き渡る。

膝をつくマーク、だんだんムキムキじゃなくなっていく。マリーが駆けつけ、倒れそうになるマークを受け止める。

マリー 「マーク？ なんで…」
困惑顔で聞くマリー。

マーク 「ごめん、飲んじゃった。……でも、これで、やっとお返し
できたね」
笑うマーク。

マーク 「今朝助けてくれてありがとう」
笑うマリー。

マリー 「こちらこそ」
マークの周りを人々が囲み、喜んでいる。
ディスオーダーだけが背を向け、フッと笑いながら
ネックウォーマーで口を隠して立ち去る。

47.

中学校・廊下（朝）

生徒がたくさんいる始業前の廊下。笑顔で歩いている
マーク。いろんな所が包帯でぐるぐる巻き。

マーク（M） 「あの後けっきょく全身肉離れになり、二週間も入院する事
になってしまった」
「でも死ななくてよかった」
アダムが走ってきて、1話の時と同じ動きでマークの
背中を叩く。

アダム 「ようヒーロー！ 退院おめでとう！」

マーク 「いたた…、おはよう」

アダム 「どうしたんだよブラザー、楽しそうな顔して」

マーク

「いや、久しぶりにみんなと会えるのが嬉しくて」
嬉しそうな笑顔になるアダム。

アダム

「なんだよそれー（笑）。それよりまたファンジンのプロット書いたからさ、後で読んでよね！」

48.

中学校・教室（朝）

自分の席に座るマーク。後ろでアダムが紙の束を落としてしまう。次のコマで、スコットが拾ってあげている。

ジェニファー

「Hi～」

マークの前方から笑顔のジェニファーが手を振りながら近づいてくる。マークは思わず片手を挙げてしまう。

ジェニファー

「おはよ。私のヒーロー」

パン、とマークの上げた手にジェニファーがハイタッチして行ってしまう。びっくりする顔のマーク。顔が赤くなってしまい、周りを見渡す。一部始終を見ていた隣の席のマリーと目が合う。

マリーが少しほほ笑む。

（終わり）